Keyword 監視カメラ　アイデンティティ　写真　視線

視線の向こう側で、私は見つめ返す

芸術研究科 造形表現専攻
写真・映像領域 博士前期課程
2026年3月修了

楊 上鋒

主査 百瀬 俊哉　**副査** 大日方 欣一　佐藤 慈

研究背景

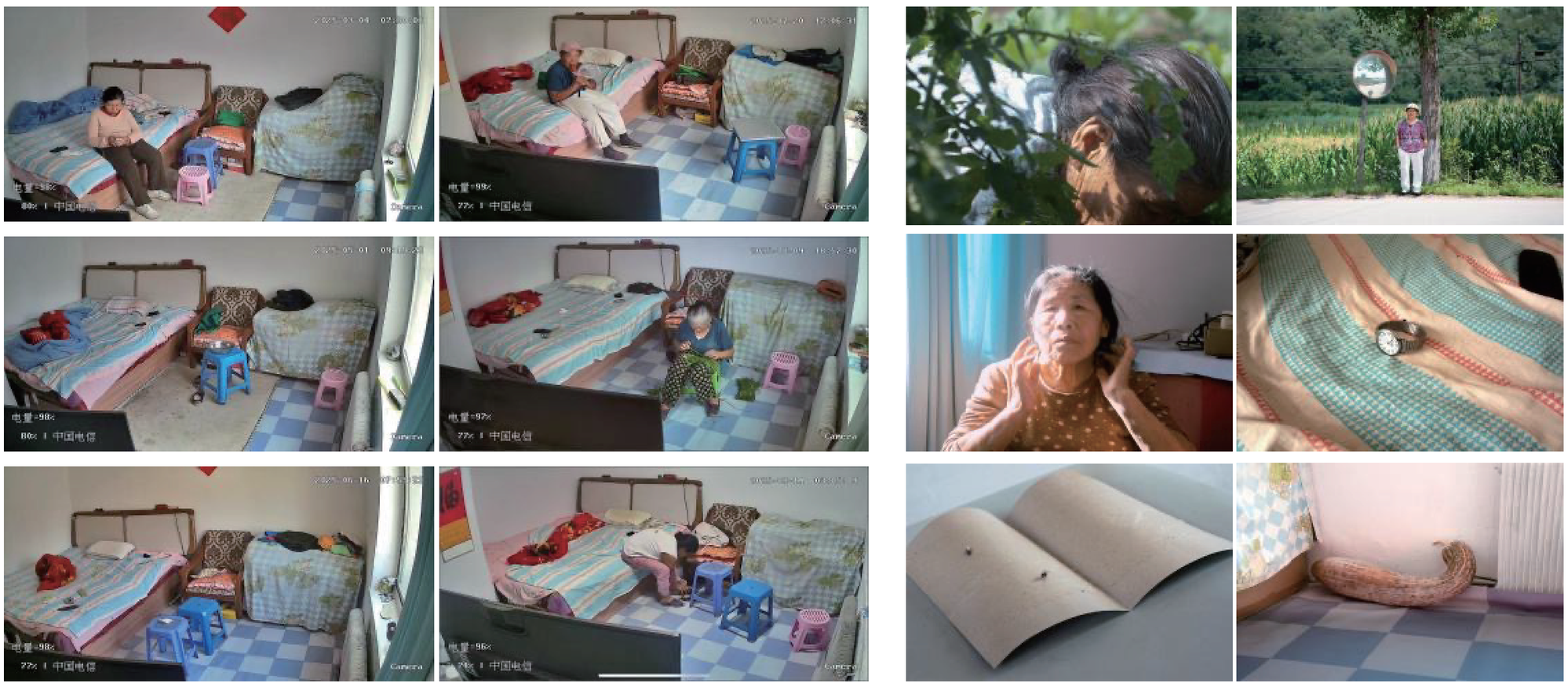
私は6歳のとき、家族の不仲をきっかけに母方の祖母に育てられ、父方の祖母とは年に数回しか会わない関係が続いた。祖母は私にとって、具体性をもたない曖昧な存在だった。2014年、祖父の病を機に共に過ごす時間が増え、私は初めて彼らなりの愛情のかたちを知った。祖母と同居を始め、彼女の部屋にあった監視カメラを目にした瞬間、親密さの中に残る距離、そして「見る /見られる」という関係性を強く意識するようになった。

研究方法・目的

本研究は、「監視的視点」と「非監視的視点」を往還しながら撮影を行う。監視カメラによる反復的な観察は、技術を介した「見る」という行為そのものを可視化し、ジャック・ラカンの鏡像理論における「見る /見られる」関係と呼応する。一方、共に生活する中での撮影は、身体的・感情的な関与を伴う第一人称的な視点を形成し、両者の対比によって親密さと支配の構造を明らかにする。

私の写真作品を通して、監視カメラを見るという行為が、高度に視覚化された社会における家族の親密さの感覚をどのように変化させるのかを探求し、監視カメラを見るという行為がもたらす主体・客体のアイデンティティの感情的不在と転位について、さらに考察を深めたいと考えている。

研究概要



成果・まとめ

祖母の日常を記録する中で、私は意識的に「監視的な視線」では見落とされがちな風景、たとえば高齢者のきわめて個人的な生活空間に目を向けるようにした。

このような実践を通して、個人による記録が、家庭内における関係性の形骸化や感情的距離といった「見えにくさ」への抵抗となりうるのか、またそれが老年期の生活経験に対する新たな理解を促す可能性があるのかを探ろうとした。同時に、親密空間における「見る」という行為そのものを問い直す視点を提示することも本研究の目的である。

指導教員コメント

本作品は、「見過ごされた存在」という視点を通して、私たちの日常的な視線の在り方を静かに問い直す試みである。動物園という身近な場を題材に、社会構造や他者性、人と自然との関係を丁寧に観察し、写真表現としてまとめている点が印象的である。制作過程を通じて、撮影者自身の視線の癖や関心の所在が明確になり、自己理解と社会的視点の双方が深められている。日常に埋もれた存在へ新たな光を当てる姿勢は、写真表現の持つ可能性を示している。

百瀬 俊哉